

The Authorized Version の成立過程

と翻訳者の精神

(The Translation Process and Translator's Mind
of the Authorized Version)

中 村 匡 克

〔序〕

本稿では370年ほど前の古い資料に基き、英文学史上特筆大書される記念塔 The Authorized Version (米国では一般的に The King James Bible。以下 A.V. と略す) の成立過程とその任に当った翻訳者たちの精神を追求する。ここでは A.V. の文学性を論じ批評を講じるのが目的ではない。文学論、批評論の前提となる客観的資料を参照しつつ、この名訳の成立過程、翻訳者たちが設定した規則、その精神を論ずる。従って、その性質上当時の資料の紹介がかなりの紙面を費すことになる。

問題として、英語聖書の系譜、即ち John Wyclif (1380年に新約聖書、1382年に旧約聖書の英訳完了)、William Tyndale (1526年新約、1530年モーセの五書訳了)、Miles Coverdale (1535年新約) から The Great Bible (1539年)、The Geneva Bible (1560年)、The Bishops' Bible (1568年) を経て The Rheims and Douai Bible (1582年新約、1610年旧約完了。前記のプロテスタント側の訳が多い中であって唯一のカトリック側の訳) に至る系譜については多く語られてきたが、それら先行諸訳の基盤となった英語以外の翻訳聖書や注解書との比較検討は比較文献学の面から興味深い問題を提起してくれるわけだが、今回は直接触れないでおく。さらに版刷による異同の問題がある。即ちA.V.は1611年に3刷出版されているが、そのうちルツ記3:15の翻訳に関して言えば、第1刷は he went into the citie となっているので He-Bible と呼ばれ、2, 3刷は she went into the citie となっているので She-Bible と呼ばれ、いわゆる He-Bible, She-Bible 論争が生じている。版刷による異同はこの

他、出エジプト記38:11 (He-Bible では *hoopes*, She-Bible では *hookes* となっている)を始め数百にわたっている。A.V. 以降今日まで続々と出版されている聖書においてさえ He もあれば She もある。即ち The Revised Version (1885年)、The New American Bible (1970年)、The Anchor Bible (1975年)、New International Version (1978年) は He-Bible であり、The Bible in Basic English (1949年)、The Revised Standard Version (1952年)、The New American Standard Version (1960年)、The Amplified Bible (1965年)、The Jerusalem Bible (1966年)、The New English Bible (1970年)、The Living Bible (1971年)、Good News Bible (1976年) などは She-Bible である。ヘブライ語原典に二通りあるために生じた問題であり、我々の重要な関心事なのであるが、今回は指摘する程度にとどめておく(我々が今回使用したテキストは He-Bible である)。また The Authorized Version という場合の *authorized* という語が、今日言われる意味において当初から用いられたわけではないが、これも一つの課題であろう。尚、引用文中の〈 〉は筆者注である。

[I]

1604年、James 1 世 (在位1603~25年) は聖書の翻訳を命ずるべく、次の書簡を London の主教 Richard Bancroft に書き送った。

余の全ての主教が次の事のために行動を起こすことを要求する。主教は夫々自分の教区内に居住するヘブライ語、ギリシヤ語に特別堪能な学者を、また、ヘブライ語であれギリシヤ語であれ聖書を個々に研究し、その中で苦闘しながら曖昧な聖句を明らかにし、従来行なわれてきた聖書翻訳書の難解な諸点、誤謬に言及している学者を探し出し、従来訳に十分な検討改訂を加えることを余は今命ずる。この件につき学者たちに書簡を送って、熱心に彼らに推めよ、そこに余の喜びがあることを示せ。学者が各自自己の意見を Cambridge 大学ヘブライ語教授 Mr Lively, Oxford 大学ヘブライ語教授 Dr Harding, Westminster 大聖堂首席司祭 Dr Andrews 宛に送付するように伝えよ。また他の幾つかの組〈Company〉にも伝えるように。かくすれば、余が上述の意図のもとに行なう翻訳は、この王国内の主だった学者の援助と推薦を得ることになろう¹⁾。

当時、Canterbury の大主教座 (see) は空位であったので、王はこの事業の全般的な

総括事務処理を、Canterbury 大主教代理を兼ねていた London の主教 Richard Bancroft に委ねた。かくして Bancroft はこの王からの手紙を王命に基き主教たちに回覧しその徹底化をはかった。王はまたこの書簡の中で事業遂行のための費用として寄附を要求し、Bancroft 自身もその事を強調したが、残念なことに、それに対する主教たちの反応はなかった。聖書の翻訳に関する王の財政的援助は不十分であったのであるが、その熱意たるものは相当なものであった。

James 1 世は彼自身、旧約の詩篇を幾つか翻訳し、新約のヨハネ黙示録をパラフレーズしたこともあり、聖書の翻訳について少なからぬ関心を抱いていた。また、そうすることによって文学的名君となり得るのではないかと内心密かに思っていたのだろう。ここに王が訳した詩篇23篇の冒頭数節を引用してみよう。

The Lord of all, my Shepherd is,
I shall from want be free :
He makes me in green pastures lye
and neare calm streams to be.

少しぎこちない面があるがなかなか良い訳詩である。A.V. では次の通りである。

The Lord is my shepherd ;
I shall not want.
He makes me to lie down in green pastures :
he leadeth me beside the still water.

このような国王の気持ちと、英国々教会 (The Anglican Church) に対するピューリタンの不満とが巧みに一致して、聖書の新しい翻訳計画が一気に実現することとなった。即ち、1603年夏、スコットランドの Edinburgh からイングランドの王都 London に向かう王の一行に——王は James 1 世として就任すべく行進していた——ピューリタン運動に熱心な清教徒の団が、Millenary Petition (「千年至福の請願」) の名で知られている訴えをおこしたのであった。それは聖書の新しい翻訳を求めたもので、英国々教会内部の熱烈な改革者 750 名の署名が添えられていた。彼らの要求は聖礼典と宗規の改革を中心とするものであった。その不満はいわゆる High Church (主教職の権威を重んじ、聖礼典を重視する英国々教会内の一派) の壮麗さと儀式偏重に対するものであり、ひいては1552年の祈禱書 (The Book of Common Prayer)

に明示されている sacrament の用語に関するものであった。彼らが求めたことは、靈的な豊かさの中にも簡素化された礼拝形態であり、ピューリタンにとって容認できないカトリック的用語の改正であった。スコットランド王として James 6 世（在位 1567～1625 年）を名乗っている人物が、今ここにイングランド王 James 1 世として即位するのに際して（これは Tudor 王朝の滅亡、Stuart 王朝の始まりであり、政治的には重大事件であった）、ピューリタンは新王に同情を求め、Anglicanism に対する王の寛大な処置を Puritanism に対しても求めたのである。

王はこの要求に対して是非の速答はせず、翌年 1604 年 1 月 16 日月曜日、居城たる Hampton Court において請願者の清教徒側と国教会側からそれぞれ高僧を招き、「教会で不都合と思われることが果たして本当かどうかを聴取し決定する目的」で会議を開催した。いわゆる Hampton Court Conference である。この会議は 3 日間続き、ピューリタンの一牧師の言葉に激怒した王が激しい言葉を残して退席する一幕もあったほど緊迫したものであった（その後も王はピューリタンの取締りを強化し、国教会が定めた新祈禱書を強制したりした）。このような雰囲気の中であったが、たまたま従来聖書の誤訳を指摘した Oxford 大学 Corpus Christi College の学長で高名なピューリタン学者 Dr John Reynolds（又は Rainolds）の次のような偶然的提案から、我々の「欽定訳聖書」の翻訳が始まるようになった。この会議自体は歴史的にはそれほど重要なものではなかったが、A.V. を登場させるという名誉ある舞台を提供したという点において、永遠に記憶されるべきものとなった。これにいたる途中の経過を詳細に記してあるのは、当時の Chester 大聖堂首席司祭 William Barlow（翻訳者の一人でもある）が記録した *The Summe and Substance of the Conference, Which, It Pleased His Excellent Maiestie to Haue with the Lords, Bishops, and Other of His Clargie……in His Maiestie Priuy-Chamber, at Hampton Court. January 14. 1603.* 『1603 年 1 月 14 日開催、ハンプトン宮殿国王の間における会議の大意要約……』である。これには従来聖書に対する当時の人々の不満、新訳への心構えがよく示されているので、少し長くなるが引用してみよう。まず Dr Reynolds はピューリタンの立場から現状の聖礼典に対して全般的な異論をとなえ、同席の London 主教や St. Paul's 大聖堂首席司祭 John Overall の反感を買ったのだが、それにも拘らず言葉を続けて、彼は

新しい聖書の翻訳が生まれてもよいのではないかという方へ国王の気持ちを動かした。なぜなら Henry 8 世〈在位 1509～47 年〉と Edward 6 世〈在位 1547～53

年〉の御時世に使用許可された聖書は誤りだらけで原典の真実に応えうるものではない……しかし、この事に対して現在反対はなく、ただ、つまらないとか古めかしいという異論があり、これに対してはすでに文書で回答がしばしば行なわれている。ただ、London 主教よ、我々は一言述べておくが、もし全ての人の気質に合うようにするなら翻訳は際限なく拡大するだろうということである……それについて国王陛下が御所望されておられることは、一つの統一された翻訳を実現させるために、特別苦勞を注いでほしいということである（陛下はこれまでに英語訳聖書の名訳を御覧になったこともないし、そのうちでも最悪なのは The Geneva Bible〈ジュネーヴ聖書、1560年訳〉だと思われていると告白なさっておられる）。翻訳は両大学の最も学識豊かな学者によって行なわれ、然る後、主教と教会側の主だった学者によって再検討されるべきである。そこから枢密院に送付されるべきである。そして最後に国王陛下によって裁可される。それゆえ教会は全てこの新しい聖書に束縛され、これ以外のものに束縛されない。その上、王は（London 主教が投げかけた言葉に対して）欄外の注は採用すべきではないという警告を発せられている。なぜなら The Geneva Bible に付いている欄外注は（これは王があるイギリスの貴夫人から贈られた The Geneva Bible の中で見つけたのであるが）、非常に片寄ったもので不真実、扇動的で、危険な上に反逆的思想の匂いが非常に強いものであったからである……そこで最後に、他の全ての人々と共にこの事を真剣な思いで思慮をこめて警告しておく²⁾。

ここに示されている Barlow の記述が全面的に真実だとは思われない。なぜなら、上記に見られる The Geneva Bible に対する王の非難一つとっても、それが王自身の言葉による非難とは考えられないからである。王はスコットランド王として在位していた1579年、そこで最初に出版された The Geneva Bible を献呈され、この聖書によって育ち、自分自身の著作の中で引用しているのもこの訳であるからである。しかしそれにも拘らず、Barlow の一文は訳の手順をよく伝えているのである。

高名なニューリタン学者 Reynolds のこの提案に気をよくした王は早速 これを採用し、その熱意の迸るままに半年もしないうちに翻訳者のリストを承認し、实际的な作業を開始するよう命令を発している。

これを受けて Bancroft 主教は早速、同年6月30日に Cambridge 大学の翻訳者に手紙を送り、

Mr Lively <Cambridge 大学ヘブライ語教授>が伝えるように、国王陛下は聖書の翻訳に従事する全員の選出に熟知され、選出された人々を心から承認された。陛下はこの宗教的事業が一刻も猶予せず実施されんことを強く要望されており、また諸兄が貴大学で出来る限り早い機会に会議を開催して作業を始めることを諸兄に指示するよう、王の名によって私に御下命になった³⁾。

と書き送っている。今や訳業の機は熟したのである。

〔Ⅱ〕

それでは具体的にどのような人々が選出されたのだろうか。それに関して最も信頼できる表は1604年頃に作成されたと考えられる。1604年7月までに翻訳者は六つの組(company)から構成され、Westminster, Cambridge, Oxford の3グループのそれぞれ2組から成っていた。次に聖書の目次の順に従って所属する組、訳者名、翻訳担当個所を列記してみよう。各組の冒頭に記されている人物がその組の統括責任者である。

- (1) Westminster 第1組……10名、(旧約) モーセの五書から列王紀下まで担当。
Lancelot Andrews (Westminster 大聖堂首席司祭)
John Overall (St. Paul's 大聖堂首席司祭)
Adrian de Saravia (Worcester 及び Westminster 大聖堂受祿聖職者)
Richard Clark (Cambridge 大学 Christ's College のフェロー)
John Layfield (Cambridge 大学 Trinity College のフェロー)
Robert Tighe (又は Teigh) (Middlesex の副監督)
Francis Burleigh (Cambridge 大学 Pembroke College 出身)
Geoffrey King (Cambridge 大学 King's College のフェロー)
Richard Thomson (又は Tomson) (Cambridge 大学 Clare College 出身)、
William Bedwell (St. Ethelburga 教会のアラビア語学者、教区司祭)
- (2) Cambridge 第1組……8名、(旧約) 歴代志上から雅歌まで担当。
Edward Lively (ヘブライ語教授、1604年没)
John Richardson (Emmanuel College のフェロー)
Laurence Chaderton (又は Chatterton) (Emmanuel College 学長)
Francis Dillingham (Christ's College のフェロー)

- Thomas Harrison (Trinity College 副学長、ヘブライ語学者)
Roger Andrews (Jesus College 学長)
Robert Spalding (St. John's College のフェロー)
Andrew Byng (Peterhouse のフェロー)
- (3) Oxford 第1組……7名、(旧約) イザヤ書からマラキ書まで担当。
John Harding(e) (Magdalen College 学長、ヘブライ語教授)
John Reynolds (又は Rainolds) (Corpus Christi College 学長、1607年没)
Thomas Holland (Exeter Collge 学長、神学教授)
Richard Kilbye (Lincoln College 学長)
Miles Smith (Brasenose College 出身、Hereford 及び Exeter 大聖堂受祿聖職者)
Richard Brett (Lincoln College のフェロー)
Richard Fairclough (New College のフェロー)
- (4) Cambridge 第2組……7名、アポクリファ (ギリシア語で書かれた經典外聖書) を担当。
Andrew Downes (St. John's College ギリシア語教授、フェロー)
William Branthwait(e) (Emmanuel College のフェロー)
Jeremiah Radcliffe (Trinity College のフェロー)
Samuel Ward (Sidney Sussex College のフェロー)
John Duport (Jesus College 学長)
John Bois (又は Boys) (St. John's College のフェロー)
Robert Ward (King's College のフェロー)
- (5) Oxford 第2組……8名、(新約) 四福音書、使徒行伝、ヨハネ黙示録担当。
John Perin (St. John's College のギリシア語教授、フェロー)
George Abbot (University College 学長、Winchester 大聖堂首席司祭)
Richard Edes (Worcester 大聖堂首席司祭、1604年没。後任者は Bath と Wells の後の主教 James Montague)
Giles Thompson (All Soul's College のフェロー、Windsor 大聖堂首席司祭)
Henry Savile (Merton College 学長、Eton College 学長)
Thomas Ravis (Christ Church 大聖堂首席司祭)
Ralph Ravens (St. John's College のフェロー) [又は L. Hutton (Christ Church 大聖堂参事会員) が担当したとも言われる]

John Harmer (New College のフェロー、Winchester College 学長)

(6) Westminster 第2組……7名、(新約) ロマ書からユダ書までの書簡を担当。

William Barlow (Trinity Hall のフェロー、Chester 大聖堂首席司祭)

Ralph Hutchinson (St. Albans 副監督)

John Spenser (Oxford 大学 Corpus Christi College の後の学長)

Roger Fenton (Pembroke College のフェロー)

Michael Rabbett (Cambridge 大学 Trinity College 出身)

Thomas Sanderson (Balliol College 出身、All Hallows 学長)

William Dakins (Cambridge 大学 Trinity College のフェロー、Gresham College 神学教授)

王は最終的には54名の翻訳者を選んだようであるが、今日 具体的に分っているのは上記47名の名前である。その選択も High Church から Puritan にわたるかなり広範囲なものでほぼ妥当なものであった。そもそもこの事業の発端がピューリタン側の発案から生じたものであるので、ピューリタン側からかなり優秀な学者が参加したのは当然のことであろうし、これはまた王の英断でもあった。国家的事業遂行という観点から、日頃はピューリタンに対して少なからぬ反感を抱いていた王も、Anglicanism に囚われることなく大英断を下したのである。尤も、具体的人選の原案を草したのは Richard Bancroft であったろうと思われる。しかし一方、ピューリタンで当代最高のヘブライ学者との評判をとり、1597年には聖書の翻訳に関する重要な提案を非公式ながら王に上申したほどの人物である Hugh Broughton は除かれていた。

「聖都エルサレムとアテネの両言語に類まれな才能を持ち、後期ヘブライ学に関する全てのことに通曉し、多くの国で有名な大英国の神学者」(1662年出版の彼の著書の題扉の句)である Broughton が除かれたのは、その議論好き喧嘩好きな性癖と横柄な態度、冷笑的に人を非難する性質のため世間から嫌われていたからであろうが、政策的に考えれば、彼は Cambridge 組の指導者 Lively と旧敵の関係にあったので Bancroft が意識的に人選から除いたのでであろう。A.V. の訳者たちが欄外の注を活用したことに対して、Broughton は腹を立てながら「一体誰が本文の中に誤訳を記入し、欄外に正しいものを書くように命令したのか」と皮肉っぽく、まさに冷笑的に非難している。

Broughton の場合は除外されるだけの理由があったが、王命を受けて全般的事務処理を委ねられ全国の主だった主教に書簡を送って翻訳事業の説得に当たった Canter-

bury 大主教代理(兼 London 主教) Richard Bancroft や、Oxford 組の Miles Smith と共に翻訳原稿の最終校訂という重要な務めを果たした Thomas Bilson (後の Winchester 主教) の名前が翻訳者の中に含まれていないのはどういうわけだろうか。

さてそれはそれとして、記念すべき翻訳者の人間像はどのようなものであったのだろうか。彼らの業績、評価に関する資料は部分的ながらも入手できる。ここでは Cardwell の詳細な研究があるのでそれを中心にして彼らの姿を前記の表の順に浮き彫りさせてみよう⁴⁾。

まず Westminster 第1組から始めることにする。この組の責任者 Lancelot Andrews は創世記から列王記下までの担当部分を全訳した学者であるが、その名声は説教家としての方が高かった。ヘブライ語の知識は絶大で、「Babel では通訳長官になっていたかもしれないほどの人物で……世間は彼がどの位学問に豊かであったかを知りたがっていた」と言われている。また東方諸言語にも詳しく、言語学上の知識、更には教父文学への造詣の深さ広さは翻訳者グループを統率するのに適わしいものであった。後に Chichester と Ely の主教を経て、最後に Winchester 主教になった。

John Overall は St. Paul's の首席司祭から後に Coventry と Lichfield の主教を経て、最後に Norwich の主教となった。前記の Lancelot Andrews よりは学者的ではなかったが、やはり優れた言語学者として著名であった。Cambridge 時代、彼はギリシヤ語講師、数学講師の任にあったが、1596年神学部の欽定講座担当教授(regius professor. Henry 8世が創設)として William Whittaker の後を継いだ。残念ながらヘブライ語学者としての彼の業績を伝えるものは現存しない。

3番目の Adrian de Saravia は Overall と同様に彼のヘブライ語の知識を客観的に伝えるものが残っていない。スペイン系フラマン人の家系で、フランス北部の Artois に生まれ、1582年 Leiden の神学部教授に就任した。後にイングランドに定住するようになり、そこでヨーロッパ諸語の学者として名声を得た。1595年、Canterbury 大聖堂受禄聖職者に任命され、1601年、Westminster 大聖堂受禄聖職者となり、同年末、首席司祭に任命された。出版されている作品は神学的傾向のものである。

Richard Clark に関する資料は乏しい。かつて Kent 州の北東部の Thanet 島にある修道院附属会堂の教区司祭であった。出版された唯一の作品は *Sermons* 『説教集』(London, 1637年)である。

John Layfield はヘブライ語学者というよりはギリシヤ語学者であったようであ

り、ギリシア語読師 (lector linguae Graecae. lector とは下級聖職位の中でも下から2番目に位する読師) の地位にいたが、ほとんどのことは分っていない。

Robert Tighe は Middlesex の副監督であったということ以外多くのことは分らず、そのヘブライ語の学識に関しても詳しいことは分っていない。次の Francis Burleigh のことも殆んど分っていない。Geoffrey King は、Cambridge 第1組の責任者 Edward Lively の後継者としてヘブライ語教授となった Robert Spalding (Cambridge 第1組) の後を継いだヘブライ語学者であった。

Richard Thomson は両親がイギリス人であったがオランダ生まれのため「オランダ人のトムソン」という仇名で知られていた。飲んだくれの言語学者としても知られていた。この組の責任者 Andrews は彼を高く評価していたようである。その作品はヘブライ語学者としての才能を披瀝している。

この組最後の William Bedwell はセム語の学者としての才能を豊かに示している。その多くの著作の中にはイングランドで最初のアラビア語辞書の編集があり、当時、東洋学者として最も傑出した学者であった。

Cambridge 第1組に目を転じてみよう。この組の責任者 Edward Lively (1545～1605年) は1605年に没し、その直後、翻訳の実質的作業が始まったので、自分が翻訳すべき歴代志から雅歌についてさえも十分な働らきをすることができなかった。1575年、Cambridge 大学の欽定講座担当教授に就任した。彼のヘブライ語の知識は抜群で、それは *Annotations in quinque priores ex minoribus prophetis* 『小預言者5名の先達に関する注解』(London, 1587年) という学術書の中で十分証明されていると言われている。彼が翻訳に当って参照したのは、原典のヘブライ語旧約聖書の他に Septuagint (70人訳ギリシア語聖書)、Symmachus (2世紀後半のギリシア語訳旧約聖書作成者)、Theodotion (2世紀頃のギリシア語訳旧約作成者)、Vulgate (St. Hierome 訳によるラテン語訳旧約)、Targum (アラム語による旧約の部分訳)、Onkelos (1世紀頃の改宗者、Targum の作成に従事)、Syriac (シリア語訳聖書)、Kimchi (又は Quimquis, ユダヤ人の傑出したヘブライ語学者、1235年没)、Rashi (Iarchius, Talmude 研究の律法学者、モーセの五書の注解、1105年没)、Ibn Ezra (又は Aben Ezra, スペイン系ヘブライの詩人、1135年頃没)、更に Arias Montanus (2世紀のキリスト教分離主義者、異端視された Montanism の指導者)、Tremellius (Cambridge 大学ヘブライ語欽定講座助教授、ヘブライ語聖書のラテン語訳、シリア語新約のラテン語訳を作成、1580年没)、Pagninus (彼のヘブライ語聖書のラテン語訳は16世紀の聖書翻訳者に大きな影響を与えた。1536年没のドミニコ派学者)、John

Calvin (Geneva の宗教改革指導者、1564年没)、Johannes Oecolampadius (ドイツの宗教改革者、Erasmus のギリシア語訳新約作成を助け、Martin Luther の運動を促進) などの多方面にわたっていた。Lively に限らず翻訳者たちはこれらのラテン系の著書を大いに参照した。彼はまた Nicholas de Lyra (ラテン語による聖書注解を著わしたフランス人、前記 Rashi の影響を受く) の注解書を活用した同時代の数少ない一人であった。ヘブライ語の文法と語彙に関して、彼はしばしば David Kimchi 著 *Sefer mikol*『完璧さの書』という文法と辞書をかねた本に触れ、Kimchi のことを「ヘブライ語博士」と呼んでいるが、この見方は同時代の人々と同じものであった。A.V. の翻訳者たちは全体的に驚ろくほどこの Kimchi に信頼を寄せていた。彼らは異なるヘブライ語から同じような訳が生じた場合にはできるだけ多くの文例を引用し、注意深く比較対照して一つの結論をだした。我々は彼の学識の中に同時代の多くの学者に欠けている謙遜さを見つける。彼はラテン・ギリシア文学の例も参照し、ピューリタンには見られない柔軟な態度と寛容さを備えた人物であった。

2 番目の John Richardson は1607年に Cambridge の神学の欽定講座担当教授に任命された。ヘブライ語学者としてかなりの評判を得ていたようであるが、それを判断する作品は残っていない。Laurence Chaderton もヘブライ語学者として評判を取っていたと言われるが、作品は残っていない。Francis Dillingham はヘブライ語学者というよりギリシア語学者であった(それでも彼は旧約のヘブライ語を訳すこの組に入っていた)。

Thomas Harrison は聖書学者、ヘブライ語学者として名声を博していたピューリタンの学者であったが作品は残っていない。Roger Andrews は Westminster 組の責任者 Lancelot の兄弟であったが、それほど著名な学者ではなかった。

Robert Spalding は Cambridge 大学で Lively の後継者になったということだけが、彼のヘブライ語学者としての能力を証明している。Andrew Byng は1608年、Geoffrey King (Westminster 組) の後を継いで欽定講座担当教授となった。1605年 Lively が没してから Cambridge のヘブライ語欽定講座担当教授は A.V. の翻訳者たち、即ち Spalding, King, Byng があいついで就任しているのである。

次に Oxford 第1組を見てみよう。この組は Oxford 大学ヘブライ語教授 John Harding に指揮されていた。彼の学識の広さを示す証拠はないが、「その記憶力と読書力は奇跡に近かった」と言われている。また、当時の Oxford のヘブライ語の学識は Cambridge のレベルよりやや下であったと言われている。

2 番目の John Reynolds はピューリタンの著名な学者で、1607年に没するまでこ

のグループと行動を共にした。ヘブライ語に関する彼の知識は、その出版された作品から明らかなように注目に値するものであった。このグループは名目上は Harding 教授に率いられていたが、実質的にはこの Reynolds が指導者であった。Hampton Court Conference で最初に最も強く聖書の改訂訳を提案したのは他ならぬこの Reynolds であり、死ぬ迄このグループのメンバーと翻訳に従事し、その為の会場となったのは他ならぬ彼の家であった。

Thomas Holland は Oxford の神学の欽定講座担当教授であった。ギリシア語とラテン語、特にギリシア語における彼の学識は注目すべきであり、言語学者として聖書学者として当時の名声は相当なものであった。

Richard Kilbye は1610年、前記 Harding 教授の後継者としてヘブライ語教授になった。彼には出エジプト記に関するラテン語の注釈書と創世記に関する Jean Mercier (当代随一の注解者、1570年没)の注解書の続編に当るものがあり、いずれも十分なヘブライ語の知識を示していた。なぜなら、有能なヘブライ語の知識がなければ Mercier の聖書注解を引き継ごうなどと考える者はいなかったからである。

Miles Smith は後の Gloucester 主教である。東方言語の学者として高名で、旧約聖書の翻訳に際して特に重要な役割を果たし、「指先きまでヘブライ語が身につけている」と言われた人物である。彼の重要性は、完成された翻訳原稿の最終校訂者として Thomas Bilson と共に任命されたことから分る。更に特記すべきことは、ジェームズ朝、ひいてはエリザベス朝散文の中でも名文と云われたA.V.の序文“The Translators to the Reader”を書いたことである。この序文については後で詳述することになろう。

Richard Brett は1604年まではひたすら古典語とセム語の知識を習得するのに励んでいた。彼はラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、アラム語、アラビア語の学者として有名であった。Richard Fairclough の身元はよく分っていない。

三つのグループのそれぞれ第1組に属する人物の素描はかくの如きものである。翻訳者全員がそうであったとは必ずしも断言できないが、当代一流の学者たちが47名の中にはきら星の如く集まっていた。第2組についても Andrew Downes, Samuel Ward, John Bois, John Perin, William Barlow など秀れた学者聖職者がいるが、彼らの人物素描は紙面の関係でひとまず省略しておく。

〔Ⅲ〕

Shakespeare とならんで英語英文学史の中でもピラミッドの頂点に位置する我々

の The Authorized Version は、実際にはどのような翻訳過程をとったのであろうか。その手順、状況を詳細に説明してくれる総合的な資料はないが、Dr Anthony Walker, John Selden, Samuel Ward などの報告書、著述が彼らの作業の一端を明らかにしてくれているので、それらを参照しながらその状況、制作過程を明らかにしてみよう。

まず伝記作家 Anthony Walker は、アポクリファを訳した John Bois (Cambridge 第2組所属) の回顧録を18世紀初頭にかけて書いているが、彼は作業の一端を次のように述べている。

James 王の心を動かして聖書の翻訳という素晴らしい事業を計画したことは神を喜ばせ給うた。彼〈John Bois〉は Cambridge 組の翻訳者に選ばれるとそれらの人々に迎えられ訳すべき部分を割り当てられた……アポクリファの1部が彼に割り当てられたことは確かだった（なぜなら、彼は自分が訳した原稿を私に見せてくれたから）。しかし、悲しいことにそれがどの部分であったのか私には分らない……

常に彼は自分の担当部分の訳に従事しており、その場合いつも食料品は St. John's 寺院で与えられていた。この寺院で彼は一週間土曜日の夜まで寝起きし、それから Boxworth にある自分の教区で牧師としての務めを果たすために帰り、月曜日の朝、今度はそこから寺院に戻って来た。自分の割り当てられた担当部分を熱心にやって終了すると、彼は次の訳を請け負った。そこで彼は他の college で食事を取った……

この最初の任務に4年かかった。最後に全ての作業が完了したので3部の聖書全訳原稿が Cambridge, Oxford, Westminster から London に送られた。翻訳全体を再検討するために個々の company (組) から2名ずつ合計6名の委員が新しく選出された。そしてこれら3部のうちから1部が抽出されて出版者に委ねられることになった……

この作業を迅速に処理するために Mr Downes と Mr Bois が London に派遣された。そこで4人の同労者に会って（尤も Mr Downes は従者に強引に連れていかれるまで行こうとしなかったが）、毎日 Stationers' Hall (書籍出版業組合事務所) に行き、9ヵ月かかって自分たちの任務を完了した。その間 The Company of Stationers (書籍出版業組合) から1週間につき30シリングの十分な支払いを受けた。尤も彼らは以前は自己報酬的で策に富んだ仕事以外は何もし

なかったけれども。この最後の仕事に従事している間、彼〈Bois〉だけは彼らの手続きの記録をとっていた。そしてその記録を彼は死ぬまで続けた…⁵⁾

しかし残念なことに、「彼が死ぬまで続けた記録」は現在残っていないし、作業が完了して出版者に委ねられた元の原稿も残っていない。また「個々の組から2名ずつ合計6名の委員」とあるが1組2名ずつなら6組あるので12名となるはずである。或は Westminster, Oxford, Cambridge をそれぞれ1つの組と考えて合計6名と計算したのであるか。定かではない。また Mr Downes とあるのは、Bois と同じく Cambridge 第2組に所属し St. John's College のギリシア語教授でフェローであった Andrew Downes のことで、彼はこの組の責任者でもあった。

この記録にも見られるように、翻訳者たちは寺院や大学寮に寝泊り、ほとんど無料で奉仕したのである。王の熱意、翻訳者たちの情熱に比して翻訳事業を遂行するための財政的基盤はまことに貧弱なものであり、王自身この事業を財政的に援助できないことを白状しており、また、教会もそれを財政的に支持するのには余り熱心ではなかった。そのような余り恵まれない状況の中で当代一流の学者聖職者が辛苦をなめながら事業を遂行していたのであり、その訳業が英文学を支える偉大な記念碑になろうとは神ならぬ身の知る由もなかった。

更に、A.V. が出版されて約80年後の1689年、好古家 John Selden (法律学者、東洋学者、政治家、1654年没) の *Table Talk* が出版されたが、その中で Selden は彼らの翻訳方法について次のように述べている。

この聖書の英語の翻訳は世界でも最高の翻訳で、原文の意味を最高に訳して英語の翻訳を作りあげた。この King James 訳に劣らず The Bishops' Bible<主教訳聖書、1568年訳>も素晴らしいものであった。しかし James 王の時代の翻訳はまた素晴らしい方法をとった。聖書のそれぞれの箇所は当該の言語に最も優れた人が割り当てられた (例えばアポクリファは Andrews Downes というようにである)。それから彼らは会議を開催した。1人が翻訳文を読むと他の人々は各自、自分が学んだ言語、例えば古典語、フランス語、スペイン語、イタリア語などの聖書を手に持った。もし誤まりがあれば議論し、もし無ければどんどん先きを読んでいった⁶⁾。

翻訳の具体的様子が手に取るように描写されている (尤も、Selden が翻訳者たちと

同時代の人間であるにも拘らず、その描写が余りにも具体的なので、この描写に疑義をさしはさむ学者もいる。

47名もの作業を統括するためには何らかの規則が設けられたことであろう。幸にもこの規則に関しては15ヵ条ほどのものがまとまって残っている。その規則が全面的に厳格に守られたかどうかは定かではないが、翻訳の手順を知るには格好の資料なので挙げてみる。これらは1604年に作られた記録で “The Rules to be observed in the Translation of the Bible” (「聖書翻訳に当って遵守すべき規則」) と題するものである。これを考案したのは誰かははっきりしないが、王から翻訳事業の全般的処理を依頼された Bancroft 主教でないかと思われる。また、このテキストは従来何度も印刷され、夫々いずれも若干異同があるので、ここでは1681年版 Gilbert Burnet 著 *History of the Reformation* を中心として研究した B.F. Westcott のものなどを参照にしながらまとめてみよう⁷⁾。

- 規則 1 翻訳者は教会で通常読まれている聖書、一般には The Bishops' Bible と呼ばれているものに従い、原典の真実が許す限り変更はしない。
- 規則 2 予言者の名前、聖書の人物名及びその他本文に登場する名前ではできるだけ一般に用いられているものに従い、またそれに近いものを保持すること。
- 規則 3 古い教会用語を保持すること。例えば Church という語を Congregation に変更しないことなど。
- 規則 4 一つの名語に幾つかの意味がある時には、大勢の古代教父たちが最も一般的に用い、文脈上適切で信仰的にも釣合いのとれた意味と一致すること。
- 規則 5 章の区分は全然変更しないこと。また、もしどうしても変更必要な場合には出来得る限り最小限度にとどめること。
- 規則 6 補足的説明を行なうために欄外注を用いないこと。しかし、ヘブライ語、ギリシア語の表現が本文中で婉曲的にしか表現できず、簡潔適切に表現できない場合は除く。
- 規則 7 聖句どうしを適切に参照できる場合には、その参照聖句の箇所を欄外に記入すること。
- 規則 8 各組の翻訳者はそれぞれ同一の章を検討し、自分で良いと思われる訳や修正案が生じた場合には、翻訳者全員が集まり協議した上で、最も適切なものに同意決定すること。
- 規則 9 このようにして各組が一つの書を完了したら、それを他の組に送付し厳正

慎重に検討してもらふこと。なぜなら国王陛下はこの点に特に慎重を期しておられるからである。

規則10 このようにして送付された各書を再検討した組が、それぞれどこかに疑義や異論を抱いた場合には、それに関する説明、その箇所、理由などを記して送り返すこと。もし両者に同意が見られない場合には、作業の最終段階で各組の責任者からなる全体会議で調整すること。

規則11 特に曖昧な部分が生じた時には、王命によって書面で国内の学識者に問い合わせ、当該箇所の判断の指示を仰ぐこと。

規則12 各主教は自分の教区の聖職者に書簡を送ってこの翻訳の着手を知らせ、当該言語に熟知する者をできるだけ多く動員しこれに委託すること。この点で協力した者は各自の意見を Westminster、Cambridge、Oxford のいずれかの組に送付すること。

規則13 各組の責任者は Westminster 組では Westminster と Chester の首席司祭、Oxford と Cambridge の両大学組においてはヘブライ語とギリシア語の欽定講座担当教授 (The King's Professor) があたること。

規則14	Tindall's	}	Bible の方が The Bishops' Bible よりも優れていると
	Matthews		
	Coverdale's		
	Whitchurch's		
	Geneva		

いうことに訳者が一致した場合、これらの諸訳を用いるべきこと。

規則15 上述の責任者以外に、上に規定した規則4をさらによく実施するために、翻訳に従事していない両大学の中から古老で威厳のある神学者を上述の責任者以外に3～4名選び、彼らをヘブライ語、ギリシア語の翻訳の監修者とするべく、学寮長の議を経て副学長が任命すること。

規則1について言えば、当時、民衆が家庭で愛好していたのは The Geneva Bible であったが、教会で用いられたのは The Bishops' Bible であった。それゆえ、1604年頃も非公式ながらもいわゆる“authorized version”的性格を持っていたのは The Bishops' Bible であったし、そのため当然のことながら、翻訳者たちはまずこの訳を直接比較対照したのである。The Geneva Bible についてよく言われることは、前述のごとく欄外注に異端的記述があり、そのことに王は非常な憤りを感じていたとい

うことである。それはこの聖書がピューリタンの傾向、特に Calvin 的色彩を多分に備えていたからであった。そのため The Geneva Bible は The Bishops' Bible よりも遙かに学問的であり人気があったにも拘らず、Anglicanism の系統外の聖書ということで、第1規則の直接対象すべきテキストとはならなかった。しかし学問的正確さに優るゆえに、翻訳者たちは実際にはこの訳を大いに参照したことであろう。規則に定められたからと言って、それが必ずしも厳格に守られたわけではなかった。

規則2の「聖書の人物などをできるだけ一般に用いられているものにする」ということは、英語の聖書を大衆のものとして親しませるという観点——この観点は、中世の伝統的なラテン語聖書からの解放を目標とした母国語訳聖書運動の伝統でもあった——からすれば当然の趨勢であった。ローマ・カトリック教会が英語訳の聖書の中にさえも神秘的秘教的性質を要求し、当時の趨勢に逆行するような傾向にあったのとは対照的である。因みにそのカトリック側の聖書 The Rheims and Douai Bible (Rheims で1578年新約、Douai で1609—10年旧約が出版された) の題扉に見られる翻訳の意図を挙げてみると、「気まぐれから聖霊の意味を消滅せしめたり制限したりすることは避けねばならぬゆえ、難かしい個所でも表現、語句を易しくしようなどとは思わず、厳格で一つ一つ逐語訳を守った」のであり、「真正のラテン語から忠実に英訳したイエズス・キリストの新約聖書」という考えであった。

規則3の「古い教会用語の保持」は民衆に親しまれる聖書の作成ということの当然の帰結であった。しかし一面、この発想は伝統的なものを破棄しようとするピューリタンの姿勢と矛盾する面もあったのは事実である。これを規則4と合わせ考える時、A.V. には本質的に Anglican 的性質が含まれていることが分る。

規則7は欄外注に相互参照 (cross-references) のために引照句の記入を認めたものである。欄外注の使用は原則として、規則6にも見られるように避けようとする傾向にあった。しかしこの欄外注の中にこそ、「当時の最高の学識が残っている」(H.W. Robinson) と言われている。なぜなら F.H. Sriverner の計算によると旧約聖書では6637個所の欄外注があり⁸⁾、そのうち4034個所はヘブライ語の字義通りの意味、77個所はカルデア語の意味、2156個所はそれ以外の読み方、63個所は固有名詞の意味、31個所は keri と ketib に関するマソラ本上の異同である。マソラ本 (masorah) とはユダヤ教の伝承に基き、6—10世紀の頃ヘブライ語の旧約聖書の原文に母音記号、句読点、欄外注を加えた校訂本である。元来、ヘブライ語は子音で成り立っているため単語の読み方に色々ある。このマソラ本文に「書かれている」(=ketib) ものとは異なる読み方を指示したものを keri (「読まれる」の意) と言う。以後このマソラ本

文が旧約のテキストとして一般に用いられるようになった。更に新約聖書には 765 個所の欄外注があり、そのうち 35 個所が様々な読み方を示し、582 個所が別の訳し方、112 個所が字義通りの訳を示している（この姿勢は 1885 年に完成された聖書 The Revised Version にも引き継がれているのである）。

規則 8—12 は翻訳の具体的進行の順序を示し、実に慎重なチェックが規定され、この 15 条の規則の中でも翻訳者の良心を示す白眉である。慎重な上にも慎重に作業を進め、誤解誤訳を避けるために英知と衆智を集める苦心の跡がに見られる。

規則 13 は責任者任命規定、規則 14 は種々の既存の英語訳の参照を推める規定（規則 1 との比較において）である。なおここに Whitchurch's Bible とあるのは The Great Bible のことである。A. V. はそれまで訳された様々な翻訳聖書の「累積の結果」（Butterworth）であり、その Butterworth が句や節を単位として計算したところによると、A. V. 訳は次のごとく既存の諸訳の影響を受けているのである。

(1380—1400年) Wyclif 訳（英文説教を含む）	4%
(1525—1535年) Tyndale の作品（Matthew Bible を含む）	18%
(1535—1541年) Coverdale の作品（The Great Bible を含む）	13%
(1557—1560年) Geneva Bible と Geneva 新約聖書	19%
(1568—1572年) The Bishops' Bible とその改訂版	4%
その他 1611年以前の全ての訳	3%
	<hr/>
小計	61%
(1611年) The King James Bible（新規の要素）	39%
	<hr/>
合計	100%

A. V. 独自の要素は、要するに 39% しかなく、61% というものは既存の訳の伝統を継承しているということになる。規則 15 は監修者の選任規定であるが、これは後で追加されたもののようである。

一方、1618 年に The Synod of Dort（ドルトの宗教会議）がオランダのドルトで行なわれた。その際、英国々教会から聖職者の代表として Andrew Downes, Samuel Ward, John Bois（いずれも翻訳に従事）が出席したが、彼らの一人（恐らく Ward であろう）が翻訳事業の要約をラテン語で報告している。そこに翻訳事業の経過や上記の規則に触れている部分があるので上記の諸規則と重複する部分があるが、資料的観点からみて重要なので、少し長くなるがそれを記してみよう⁹⁾。これを研究した

Westcott の業績は素晴らしく、彼はこの種の主題を扱ったもののうちで最も総合的な名著を残している。

ロンドンにいる神学者に 2 部が割り当てられ、残りの 4 部は両大学の神学者に平等に割り当てられた。

各組が自分の仕事を完了すると、各組より選ばれた 12 名の代表者が全員で会議を持ち、翻訳全体を再検討し改訂を施した。

最後に Winchester 主教 Bilson 師と現在の Gloucester 主教で高名な Dr Smith が——彼らは最初からこの仕事全体に深く関わっていた——全の作業を熟慮し慎重に考察検討した後、この訳業に最終的な仕上げの手を加えた。

翻訳者のために設けられた規則は次の通りである。

第 1 に、注意を払うべきことは完全に新しい訳が提出されないようにすること。また、長い間教会で受け入れられてきた古い訳から欠点欠陥を除去すべきこと。原典の真実やそれを強調することが要請されない限り、この目的を達成するために古い訳から逸脱しないこと。

第 2 に、欄外に注を施こさないで、ただ当該聖句と平行する聖句を注として記入すること。

第 3 に、ヘブライ語であれギリシア語であれ、一つの前語に対応する適当な意味が二つある場合、一つは本文中で表現しもう一つは欄外注として記入すること。幾つかの優れた訳の中に異なる読み方が見られる場合も同様に処理すること。

第 4 に、更に難しいヘブライ語法、ギリシア語法も欄外に委ねるべきこと。

第 5 に、Tobit と Judith〈共にアポクリファ〉の訳に当って、ギリシア語テキストと古い Vulgate〈70 人訳聖書〉のラテン語訳との間に何らかの大きな矛盾が見出された時には、訳者はできるだけギリシア語テキストに従うこと。

第 6 に、意味を完全なものにするため本文中に挿入して補う必要のある語は、小形のローマン活字など本文に使われていない活字を用いて、そのことを明らかにすること。

第 7 に、各書の初めに新しくテーマを記入し、更に各章の初めに新しい見出しを加えること。

最後に、完全な系図と聖地の地図がこの訳業に付け加えられること。

第 4—8 は前記の 15 の規則を十分に補ってくれるものであろう。

こゝに見られる Bilson と Smith は最後の印刷の業務を見るように任命された上

に、Bilson は各章の見出しを執筆し、Smith は、後に Jacobean きての名文と評されるようになった序文 “The Translators to the Reader”——1611年の Folio で 11頁にわたるもの——を執筆した。系図と地図は歴史家 John Speed (1552~1629年)の手になるものであった。

〔IV〕

いよいよ Jacobean 朝の名文である序文について語る時がきたようである。この執筆者は今まで述べてきたように、Oxford 組として旧約のイザヤ書からマラキ書の訳を担当した Miles Smith であった。翻訳を担当していた頃は Hereford と Exeter の受禄聖職者にしかすぎなかった彼は、後に Gloucester 主教に任命されるほどになった。その学識は「指さきまでヘブライ語が身についている」と言われたほどである。この名文の日本語による全訳が行なわれているのか否か、筆者は寡聞にして知らない。資料としての重要性を考え、我々の主題と直接関係深い部分をこゝに紹介しよう（また、近年出版されている A.V. の英語聖書には王への献呈文は掲載されているのに、不思議なことにこの序文が殆んど削除されている。残念なことである）。こゝで用いたテキストは1611年に王室御用達の印刷業者 Robert Barker によって出版された実に美事な Folio 版である¹⁰⁾。その題扉には次の通り記されている。

The Holy Bible Conteyning the Old Testament, and the New: Newly Translated out of the Originall tongues: & with the former Translations diligently compared and reuised by his Maiesties speciall Comandement. Appointed to be read in Churches, Imprinted at London by Robert Barker. Printer to the Kings most Excellent Maiesties, Anno Dom. 1611.

（聖書。新旧約聖書を含む。原語よりの新訳。国王陛下の特命により従来の諸訳と入念に比較改訂されたもの。教会で読まれるように指定さる。国王陛下御用達の印刷業者 Robert Barker により London で印刷さる。西暦1611年）。

「万人の善を高めんとする熱意たるものは、それが己れ一人で何か物事を考案する時であれ他人が詳細に論じたことを改訂する時であれ、必ず、多大の尊敬と敬意を受けるのに値するものであるが、しかしながら、この世では冷淡な処遇しか受けないものである。それは愛情をもってではなく嫌疑の念をもって迎えられ、感謝の心をもってではなく対抗意識をもって迎えられものである。屁理屈の入りこむ隙間が残され

ていれば(もし隙間を見出すことができなければ、屁理屈はその隙間をも作り出すだろう)、必ず、その熱意は誤解され危険な目にあい、難詰されるのである。歴史を知り経験に富む多勢の人々によって、この事は容易に認められるであろう…。序文“The Translators to the Reader”の書き出しである。Smith がこれを書いたのは1610年頃と思われるが、緊迫した力強い文章で説得力に富むレトリックの見本である。まず、人間が新しい事業を起こす場合に生じる人間どうしの不信感を指摘することによって文は始まる。

次に王は聖書の翻訳に関して一部より非難を受けながらも、熱意をもってこの事業に邁進し、その「英語の翻訳調査に対する誠実」さが語られる。初代ローマ皇帝の臣下に対する姿、キリスト教徒としての皇帝たちの様々な姿が説明され、ローマ帝国でキリスト教を公認(313年)したあの Constantine 皇帝にまで話し及ぶ。

「真実を伴わない神への思いとは何か、神の言葉を伴わない真実とは何か、聖書を伴わない神の言葉とは何か」と段階的に理論を展開し読者に訴え、何よりもまず信仰の中では自分自身の目で聖書を読むことの大切さを(全く理解できないラテン語の聖書の朗読を聞かされるのではなく)、幾つかの事例を挙げて強調する。例えば、「日々聖書を調べる」(使徒行伝17:11)といった聖書の言葉を幾つか引用したり、古代教父 St. Augustine (354—430年、初期キリスト教会最大の指導者、神学者)が神秘的状況の中で聞いたという神の言葉「＜聖書を＞取りて読め、取りて読め」に関する古事、更に St. Hierome (340—420年、古代キリスト教会の代表的教父。Vulgateの完成者)などの教父に関する古事を引用している。聖書を自国語で読むという考え、何よりも信仰の基本は聖書であるという考えは、14世紀の John Wyclif (1320—84年)、その信奉者で迫害を受けた Lollards 一派の活動を継承したものである。序文は次のように続く。「聖書を研究することの目標とそれから受ける報酬、聖者たちとの交流、神々しいものへの参加、不滅にして汚れない遺産を受ける喜び、これらは決して消滅することはないだろう。幸いなるかな聖書に喜びを感じる者は。幸いなるかな昼となく夜となく聖書に思い馳せる者は。3倍も幸いなるかな」と讃美は続く。

しかし、ギリシャ語、ヘブライ語、ラテン語などで書かれている場合、人は「理解できないものにどうして思いを馳せることができようか」。人間は自分が知らない国の人や言葉を「野蛮」と呼び理解しない。「St. Hierome でさえもヘブライ語を野蛮」といふ、Constantinople の皇帝もラテン語を野蛮」と呼ぶほどのだから、そのような状況の中でどうしてラテン語、ヘブライ語、ギリシャ語を理解できるだろうかと痛烈に指摘する。聖書を万人のものにしようとするビューリタニズムの発露である。

「翻訳するということは窓を開けて光を入れることである。貝殻をくぐってその実を食べようとするのである。カーテンをはずして最も聖なる場所が見えるようにすることである。井戸の蓋を取り除いて水の傍に近寄れるようにすることである。丁度ヤコブが井戸の口から石を転がしてそれによってラバンの羊の群れが水を飲んだように。実際、自国語への翻訳が無ければ、学問の無い者は水を汲むバケツも何も持たずに深いヤコブの井戸にいる子供のようなものである」と。この感動的な文は Rheims-Douai 聖書の序文に見られるカトリック的発想、即ち「(ラテン語以外の) 俗語に訳された聖書は全ての農民、職人、徒弟、少年、少女、即婚した男女、未婚の男女が手にし、また、全ての^{いかけ}鋤掛屋、居酒屋の親父、詩人、旅芸人などが歌い踊って引用し、また、食卓、酒宴、船遊びの時に話に引きあいに出したり、全ての冒瀆的な個人または団体で使うものと考えてはいけない……貧しい農民は聖歌や詩篇を読んだり、その意義や秘義を知ることができないものだが、神聖な教会において聞いた通りのものであるならば、その意味は理解できなくても、大地を耕しながら讚美することはできるのだ」という発想とはっきり対決するものであり、権威主義を否定するピューリタンの個人主義の発露でもあった。

次にエジプト王 Ptoleme Philadeph (B.C. 247年没) の命により紀元前3世紀頃に出来たといわれる Septuagint (Alexandria で70人または72人のユダヤ人が72日間で訳了したと言われるギリシア語訳旧約聖書と外典。LXX と省略。翻訳史上非常に重要な存在。Septuagint とは「70」の意) の成立とその重要性を述べる。

更に、西暦405年に完成した Vulgate (ローマ法王 Damasus 1世の勧めで当時の碩学 St. Hierome が訳したラテン語訳聖書。中世における全西方教会の聖書となった。Vulgate とは「一般に通用しているテスト」の意) に言及する。「かくして教会はキリストの信仰がヨーロッパで一般に受け入れられる前に、すでにギリシア語とラテン語の聖書を持っていたが……神学を学ぶ者は己れが理解していた言語即ちギリシア語とラテン語の聖書を手にすることに満足しなかったばかりではなく……義に飢え渴く無学な人々を教化するため、かつ自分と同様にその魂が救われる人々のために、そしてまた農民のために彼らは自国語による翻訳を用意したのである……かくしてキリストは母国語で彼らに語り、聖職者の声を通してだけでなく翻訳されて書かれた言葉で語りかけたのである……」。もはや一般信徒が聖書を読むための資格、保証、学力などは不必要となったのである。このことは St. Hierome も支持するところであったろう。そして漸次、ローマ教会もこれを認めることになる。

次にこの事業に対して賛否両論があることが指摘され、再び三度、St. Hierome の

言葉が引用される。この聖者の存在はそれほど大きかったのである。ローマ・カトリック教徒として原典からラテン語訳聖書を完成させたこの聖者は熱っぽく語る、「我々は先祖（の事業）を非難しようとするのか。断じてそんなことはない。我々より前に生きぬいた先人の努力を継承し、我々は神の家で最大限の苦勞をするだけである」と。翻訳事業に好意ある人々の賛意をますます深め、異論ある人々の翻意を促そうとする。

このように全般的議論から発し、尊敬する教父、聖者たちの見解を引用しながら論は展開され、文は力強く進む。

「実際の所、（善良なキリスト教徒の読者たる）我々は新しい訳が必要であるとか、ひどい訳を良い訳にするとかを最初から考えたのではなく……また単に異論を唱えるために訳すということではなく、今までの良い訳を更に良い訳にするとか、多くの優れた訳から更に中心的となるべき良い訳を選ぶということを考えていた。それが我々の試みであり特徴であった。その目的のために多くの者が選ばれたのである。彼らは自分自身ではそう思っていないくても他人の目から見ると偉大な人々であり、自己に対する称賛よりも真実を求めた人々であった…。翻訳者たちの真実に対する謙虚さ、先哲の業績を基盤として更に優れた訳を作り出そうとする熱意がそこにある。A.V. のタイトル・ページには、前記のように「原語よりの新訳。国王陛下の特命により従来^の諸訳と入念に比較、改訂されたもの」とあるが、この「新訳」というのも無よりの創造を意味していたのではなかった。それは Butterworth の研究が示す通りである。

「そして彼らは如何にして集まったのであろうか。あたかもこの肉体の腕の中に宿っているかのように己れの知識を信じ、機知の鋭さを信じ判断力の深さを信じて集まったのだらうか。彼らが信じたのは、戸を開いて誰も閉じることの出来ない David の鍵を持つ人間であった。彼らは St. Augustine が『汝の聖書を我が清き喜びとなし給え、我れがそれに欺かれることの無きように、またそれによって人を欺くことの無きように導き給え』と祈った祈りと同じ趣旨のもとに、主^{しゅ}に、主なる神に祈ったのであった。この確信と献身的心をもって彼らは集まったのである。お互に他人に迷惑をかけることを恐れたがゆえに、それほど多勢というわけではなかった。それでも遺漏が多く生じてはいけないという懸念からかくも多勢になってしまった。彼らの眼前にあったものは何かと言えば、ヘブライ語による旧約聖書とギリシヤ語による新約聖書の原典であった。この2巻が黄金の^{くだ}管、というよりは泉であり、それがオリーブの枝を通して黄金へと注がれるのである。St. Augustine はこの2巻の原典を典拠とすべき先駆、本源的言語と呼び、St. Hierome は泉と呼んだ……もし真実がこれらの言

葉で語られているのなら、この原典以外のどこから一体翻訳が可能となり得るのだろうか……もし伝えられていることが本当なら Septuagint は72日間で完成されたということであるが、我々はそのように急いで訳を完成させることはしなかった。もしそれが本当なら St. Hierome が自ら伝えていることだが、彼が書き終えるや否やすぐにそれは彼から取りあげられて出版され、訂正することも許されなかった。しかし我々の場合は、訳を終えてそれを再び吟味することができなかつたり妨げられたりすることはなかった……そのようなことは全くなかった。この作業は72日間で寄せ集めにやられたのではなかった。それどころか明らかに分るように、72日の14倍、いや、それ以上の労苦を翻訳者たちにかけている。このように重大で影響力のある事は円熟さの中で促進されるべきことなのである。仕事をやっている瞬間には、人はやむをえず遅くなるのを非難されても何とも思わないものである。我々はまた他の翻訳者や注解者——カルデア語、ヘブライ語、シリア語、ギリシヤ語、ラテン語、更にスペイン語、フランス語、イタリア語、オランダ語など——のものを参照する事を重要だとは考えなかった。我々がすでに行なったことを更に修正するのを潔しとしないわけではなく、苦勞して金鎚で叩きあげたものを鉄敷き^{かな}にもどすのを潔しとしないわけでもないし、必要なだけの豊かな援助を受け活用し、仕事が緩慢であるという非難も恐れず、逆に、仕事が迅速であるという事に対する称讃も求めないでおるゆえ、我々に対する主の良き導きの御手のおかげで、我々は遂に、今、皆さんが目にする事が出来る水路にこの作品を導きだすことができた。」

「秘められたことに疑いを持ち、不明確な事柄と葛藤するのは良きことである。聖書には多くの言葉があり、それはすぐに理解されるものではないし、(ヘブライ人が言うように兄弟も同胞もいなかったのも、場所のことで相談の援助を受けられなかった)。更に、鳥、獸、宝石などについて珍しい名前が沢山あり、それに関してはヘブライ人自身の間でもその判断に意見が分裂しているので、彼らがあれこれ迷っているように見る。それはSt. Hierome が Septuagint について語っているように、彼ら自身が自分の語ったことに確信を持っているというよりは、むしろ、何かにつけてよく口を挟むという習性のためであった。さて、そのような場合には、欄外に記入して読者の探求心を十分促すのは当然なことではないだろうか。あれこれ断定的に結論づけたり、独断的に主張しないように促すのは当然なことではないだろうか。なぜなら、明白な事を疑うと不信という過ちに落ち込むと同様に、神の聖霊が不確かなものとして放置してある事を、(判断力ある人の判断においてさえも) それを断定的に結論づけるのは厚かましいということで納まることではないのである。様々な翻訳は

聖書の意味を見出すのに大いに役立つものだと、St. Augustine が言ったように、原典の意味が明解でない場合には欄外に示される様々な意義と意味が役立つに相違ない……賢明な彼らは他に読み方がある時には、一つの読み方に固執するよりは、むしろ、様々な読みの違いの中で自由に判断を下したわけである。尤も、もし彼らの大祭司の Paul 2 世〈在位1464—71年〉が自慢したようにその胸の内に全ての法を秘め、かつローマの独裁者たちが法によって神聖犯すべからざるものとされたように、大祭司も特権を与えられているので誤まりは犯さないものであると確信しているのなら、話しは別であろう。その時には大祭司の言葉は神託となり、彼の意見は決定的意見となろう。しかし神は感謝すべきかな、今や世界の目は開かれており、また長い間開かれてきたのである。大祭司も他の人々と同じ愛情と欠点に晒されているし、その皮膚を突き通すことができることに彼らは気付いている……」

「我々はさらに一律的な言い回しや言葉の独自性に自分を縛りつけなかったということを、(優しい読者たる) 皆さんに 勧告しておくことは良いことだと思っている。なぜなら、数人の学者がどこか他の本で可能な限り正確に訳したことを目撃した人がいるので、同じように我々も何かの偶然で、そうやったと思われるかもしれないのである……しかし同じ特定の言葉で同一の概念を表わすべきであろう。例えば、もしあるギリシヤ語なりヘブライ語を一度 Purpose と訳したなら、それを Intent と訳さない。Journeying<=Journeying> と訳したら Traueiling <=Traveling> と訳さない。Thinke <=Think> としたら Suppose としない。Paine <=Pain> としたら Ache としない。Ioy <=Joy> としたら Gladnesse <=Gladness> としないなどである。かくして、ごく控え目に言うならば、知恵というよりは好奇心の香りを付けることを考え、信心深い読者の益になるというよりは無神論者の嘲笑をもたらすことを考えた。なぜなら、神の国とは言葉や音節のことなのだろうか、自由であることが出来るならばなぜそれらの言葉や音節に束縛されるべきなのだろうか、他にそれに劣らず手頃で適切な言葉が使用できる時になぜ堅苦しく一つの言葉に拘束されるべきなのだろうか……」

「最後に一方では、我々はピューリタンの慎重さを避けた。なぜなら古い教会用語を放棄し他の用語を用いているからである。例えば彼らは Baptisme <=Baptism> のかわりに washing、Church の代わりに Congregation としている。また他方ではカトリック教徒どもの不明瞭さ、即ち Azimes <=unleavened bread、種なしパン>、Tunike <=coat、衣>、Rational, Holocausts <=offerings、燔祭>、Praepuce <=Prepuce, uncircumcision、無割礼>、Prasche <=Passover、過越し>、

更には、最近の彼らの翻訳の中に充満し意味を曖昧にするのを目的としている同じような用語を避けた。彼らは聖書の言語で聖書を訳さなければならないので、訳された物が理解されなくてもよいのであろう。しかし我々が願っていることは、聖書がカナン¹の言葉で語られたのと同様に、おのずから自国語でも語られるものであるということなのである」。前述した規則3「古い教会用語を保持すること」が、偏狭なピューリタンの用語、独断的カトリック用語と明確に対峙する形で主張されている。

「まだ序文の範囲を越えていなければ、(優しい読者よ) 他に沢山のことが警告できるかもしれない。やはり我々はあなたがたが自分を神に、神の恩寵の聖霊に委ねることを推める。神は我々が考え求める以上のものを創造し給うからである。神は我々の目から鱗^{うろこ}を取り除き、心から被^{おおい}を取り除き、神の言葉が理解できるようにと我々の知力を開き心を大きくなさしめ給い、更に、金銀にもまして神の言葉を愛し、最後まで愛せるようにと我々の心を正し給う。あなたが掘ることのなかった生命の泉^{いづな}に誘い給う。ペリシテ人と共に泉に泥を投げるなかれ、悪しきユダヤ人と共に泉の前の滅びの穴を好むなかれ……もし光がこの世に來たのなら光より闇を愛すことなかれ。もし食物や衣類が与えられたのなら裸で歩くなかれ、己れを飢えさすなかれ……それは神が祝福されたことであり、最後には永遠の祝福をもたらしてくれるだろう。その時神は語りかけ給う、耳を傾けて聞けよと。その時神は我々の前に言葉を置き給う、それを読めと。その時神はその御手を伸ばして呼び給う、応えよと。神よ、私はこゝにおります、あなたの意志を行なうためにこゝにおります……」と。人間の不信感に対する陰惨な指摘で始まった序文は、訳者たちの学者的良心の在り方を示し、最後には信仰告白とも言うべき言葉で終わっている。1644年に多くの人気を持っていた The Geneva Bible の最終版が出版され、それを契機として A.V. 訳が人気を獲得し、更に、王政復古の Charles 2 世 (在位1660—85年) によって A.V. 訳が裁可され聖職者たちに承認されるに及んで、公私共に不動の位置を占めるようになった。当時の碩学 Broughton に罵倒され多くの批判の波の上の漂い、当初は決して authorized という本来の意味において authorized されたことはなく、誤まり多く欠点があったにも拘らず、この欽定聖書が今日まで燦然と輝き続けているのは、訳者たちが身につけていた聖書と先哲の学問に対する謙虚さ、そして文章に対する鋭敏な感覚の賜物であろう。

〔註〕

- 1) A.W. Pollard, *Records of the English Bible: The Documents relating to the Translation and Publication of the Bible in English, 1525—1611*, Oxford, 1911,

pp. 55-56.

- 2) William Barlow, *The Summe and Substance of the Conference, 1603*, London, 1683, pp. 45-47.
- 3) C. Anderson, *The Annals of the English Bible*, London, 1854, II, pp. 320-21.
- 4) E. Cardwell, *Documentary Annals of the Reformed Church of England*, 2nd ed., Oxford, 1844, II, p. 144 ff.
- 5) Pollard, *Records*, pp. 55-56.
- 6) John Selden, *Table Talk of John Selden*, edited by F. Pollock, London, 1927, p. 10.
- 7) B.F. Westcott, *A General View of the History of the English Bible*, 3rd ed., revised by W.A. Wright, London, 1905, p. 116 ff.
- 8) F.H. Sriverner, *The Authorized Edition of the English Bible 1611*, Cambridge, 1884.
- 9) *ibid.*, p. 120 ff.
- 10) *The Holy Bible Conteyning the Old Testament, and the New.....Anno Dom. 1611.* reprinted by Nan'undo, 1982.

参考文献

- 1) *The Holy Bible Conteyning the Old Testament, and the New: Newly Translated out of the Originall tongues.....Printer to the Kings most Excellent Maiesties. Anno Dom. 1611*, reprinted by Nan'undo, 1982. (テキストとして)
- 2) William Barlow, *The Summe and Substance of the Bible, Which, It Pleased His Excellent Maiestie, 1603*, London, 1683.
- 3) John Selden, *Table Talk of John Selden*, ed. F. Pollock, London, 1927.
- 4) E. Cardwell, *Documentary Annals of the Reformed Church of England*, 2nd ed., Oxford, 1844.
- 5) C. Anderson, *The Annals of the English Bible*, London, 1854.
- 6) B. F. Westcott, *A General View of the History of the English Bible*, 3rd ed., revised by W.A. Wright, London, 1906 (First edition 1868).
- 7) A.W. Pollard, *Records of English Bible: the Documents relating to the Translation and Publication of the Bible in English 1525-1611*, Oxford, 1911.
- 8) C.C. Butterworth, *The Literary Lineage of the King James Bible 1340-1611*, Pennsylvania, 1941,
- 9) F.H. Scrivener, *The Authorized Edition of the English Bible 1611*, Cambridge, 1844.
- 10) F.G. Kenyon, *Our Bible and the Ancient Manuscripts: Being a History of the Text and its Translation, etc.* 4th ed., London, 1939, (First edition 1895).
- 11) H.W. Robinson, *The Bible in its Ancient and English Versions*, Greenwood, 1970, (First edition 1940).
- 12) David Daiches, *The King James Version of the English Bible*, Archon, 1968, (First edition 1941).
- 13) W. Schwarz, *Principles and Problems of Biblical Translation*, Cambridge, 1955.

中 村 匡 克

- 14) A.C. Partridge, *English Biblical Translation*, Andre Deutsch, 1973.
- 15) F.F. Bruce, *The English Bible*, Lutterworth, 1961.
- 16) C.F. Evans, G.W.H. Lampe, S.L. Greenslade, *The Cambridge History of the Bible*, Cambridge, 1970.
- 17) J.P. Lewis, *The English Bible from KJV to NIV, A History and Evaluation*, Michigan, 1981.
- 18) D.A. Carson, *The King James Version Debate*, Michigan, 1979.

(なかむら まさかつ 本学助教授英語)